

1 茶摘みうた

一 夏も近づく 八十八夜

野にも山にも 若葉がしげる

あれに見えるは 茶摘みじゃないか

茜だすきに すげの笠

二 ひよりつづきの きょうこのごろを

心のどかに 摘みつつ歌う

摘めよ摘め摘め 摘まねばならぬ

つまにや日本の 茶にならぬ

2 早口言葉

一 となりの きやくは よく かきくう きやくだ

二 なまむぎ なまごめ なまたまご

三 とうきよう とつきよ きよかきよく きよう きゆうきよ

とつきよ きよか きやつか

四 ぼうずが びょうぶに じょうずに ぼうずの えをかいた

五 やしのみを ししがくい ひしのみを ひひがくう

六 あの竹がきに 竹立てかけたのは 竹立てかけたかっだから

竹立てかけたのです

七 生バナナ 生バナナ 生バナナ 生バナナ 生バナナ……(十回くりかえす)



3 かいぶん  
回文

一 とまと ↓

二 いかたべたかい ↓

三 たけやぶやけた ↓

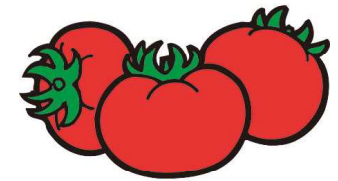
四 だんすがすんだ ↓

五 わたしまけましたわ ↓

六 るすになにする ↓

七 しんぶんし ↓

八 よいせんせいよ ↓



4 つけだし言葉  
付 け 足 し 言 葉

一 おどろ 驚き 桃の木 山椒の木

二 あたりき車力よ車曳き

三 あり 蟻が鯛なら芋虫や鯨

四 うそ 嘘を築地の御門跡

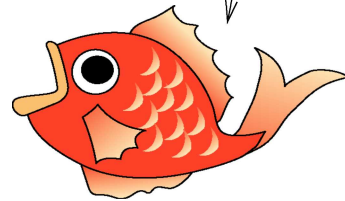
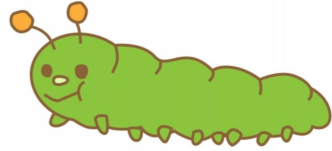
五 おそ 恐れ入谷の鬼子母神

六 おつと合点承知之助

七 その手は桑名の焼蛤

八 なにか 何か用か 九 日十日

九 なにか 何がなんきん唐茄子かぼちや



5 一番はじめは（数え歌）

- 一番はじめは一の宮
- 二また日光中禅寺
- 三また佐倉の宗五郎
- 四また信濃の善光寺
- 五つ出雲の大社
- 六つ村々鎮守様
- 七つ成田の不動様
- 八つ大和の法隆寺
- 九つ高野の弘法様
- 十で東京心願寺

6 いろは歌

- いろは にほへと ちりぬるを
- わかよ たれそ つねならむ
- うるの おくやま けふ こえて
- あさき ゆめみし ゑひも せす



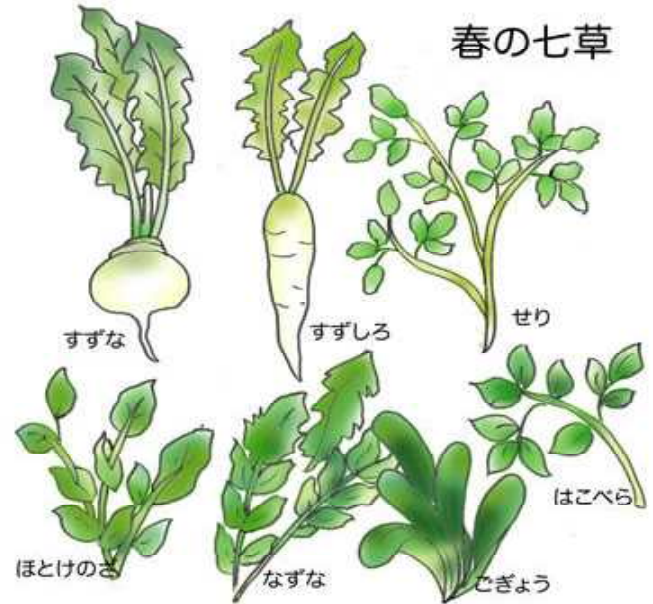
いろはにほ ち  
 色は匂へど散りぬるを  
 わ よたれ つね  
 我が世誰ぞ常ならむ  
 うる おくやまけふこ  
 有為の興山今日越えて  
 あさきゆめみ ゑ  
 浅き夢見じ酔ひもせず

7 はる **春の七草** ななくさ

せり  
なずな  
ごぎょう  
はこべら  
ほとけのざ  
すずな  
すずしろ

せり 芹  
なずな 菜  
ごぎょう 御形  
はこべら 繁縷  
ほとけのざ 仏の座  
すずな 菘  
すずしろ 蘿蔔

春の七草



8 あき **秋の七草** ななくさ

あき 秋の野に  
かき数ふれば  
咲きたる花を  
七種の花

およびお  
指折り

はぎのはな  
おぼな  
くずばな  
なでしこのはな  
おみなえし  
またふじばかま  
あさがおのはな

はぎ 萩の花  
おぼな 尾花  
くずばな 葛花  
なでしこのはな 瞿麦の花  
おみなえし 女郎花  
ふじばかま 藤袴  
あさがおのはな 朝貌の花

(はぎ)  
(すずき)  
(くず)  
(なでしこ)  
(おみなえし)  
(ふじばかま)  
(ききょう)

やまのうえの **山上憶良** おくら

万葉集 山上憶良

秋の七草

秋の野に 咲きたる花を 指折り  
かき数ふれば 七種の花



9 十二月

(二月) 睦月  
(三月) 如月  
(四月) 弥生  
(五月) 卯月  
(六月) 皐月  
水無月

(七月) 文月  
(八月) 葉月  
(九月) 長月  
(十月) 神無月  
(十一月) 霜月  
(十二月) 師走

10 十二支

子 丑 寅 卯 辰 巳  
午 未 申 酉 戌 亥



11 十干

甲 乙 丙 丁 戊 己 庚 辛 壬 癸

12 論語

孔子

子曰、学まなびて時ときに之これを習ならう、亦また説よろこばしからずや。朋とも有あり、遠えん方ほうより来きたる、亦また樂たのしからずや。人ひと知しらずして、慍いきどおらず、亦また君子くんしならずや、と。

(漢文) 子曰、学而時習之、不亦説乎。有朋自遠方来、不亦樂乎。人不知而不慍、不亦君子乎。

(訳) 孔子はおっしゃった。学問がくもんをすること、そして実践じっせんを通して身みに付けていくこと、これは無上むじょうのよろこびだ。しだいに同志どうしができ、見みず知しらずのその同志どうしたちが集あつまってくる。こんな楽しいことはない。人ひとにみとめられようが認みとめられまいが、そんなことは気きにかけずに勉強べんきょうを続つづける。これが本当ほんとうの君子くんしである。

二 子曰わく、学びて思はざればすなはち罔し、思ひて学ばざればすなはち殆し、と。

(漢文) 子曰、学而不思則罔、思而不学則殆。

(訳) 読書にのみふけて思索をおこたると、知識が身につかない。思索にのみふけて読書を怠ると独善的になって危険である。

三 子曰わく、故きを温ねて新しきを知る、もって師となるべし、と。

(漢文) 子曰、温故而知新、可以爲師矣。

(訳) 孔子先生はおつしやいました。「歴史を深く研究することを通して、現代への認識を高めて行く態度、これこそ指導者たるの資格である。」と。

四 子曰わく、吾れ十有五にして学に志す。

三十にして立つ。

四十にして惑わず。

五十にして天命を知る。

六十にして耳順ふ。

七十にして心の欲する所に従えども、矩を踰えず、と。

(漢文) 子曰、吾十有五而志於学。三十而立。四十而不惑。五十

而知天命。六十而耳順。七十而從心所欲、不踰矩。

(訳) 先生がおっしゃった。「わたしは十五歳で学問によって身を立てようと決心した。三十歳になって自分の立場ができた。四十歳になって自分の方向に確信をもった。五十歳になって天から与えられた使命を自覚した。六十歳になつてだれの意見にも素直に耳を傾けられるようになった。そして、七十歳になると自分をおさえる努力をしなないでも調和が保てる自由な境地に達した。」

『論語 中国の思想 9』久米旺生 徳間書店 二〇〇四年 から引用

### 13 土佐日記

紀貫之

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。  
その年の、しはすの、二十日あまり一日の日の、戌の刻に門出す。  
その由いささかにもに書きつく。  
(以下略)

(訳)

男も書くとき聞いている日記というものを、女であるわたしも試みてみようと思つて書くのである。某年の十二月の二十一日、午後八時頃に門出する。そのたびのことを、少しばかり書きつける。

14 平家物語

祇園精舎の鐘の聲、

諸行無常の響きあり。

娑羅双樹の花の色、

盛者必衰の理をあらはす。

おごれる人も久しからず、

唯春の夜の夢のごとし。

たけき者も遂にはほろびぬ、

偏に風の前の塵に同じ。(以下略)

祇園精舎の鐘の音は、諸行無常の響きを立てる。

釈迦入滅のときに、白色に変じたという娑羅双樹の花の色は、盛者必衰の道理を表している。

おごり高ぶった人も末永くおごりにふけることはできない。ただ春の夜の夢のようにはかないものである。

勇猛なものもついには亡びてしまふ。全く風の前の塵と同じである。

15 百人一首

千早振る 神代も聞かず

竜田川 韓紅に

水くくるとは

在原業平

朝臣

神代の昔にも聞いたことがない。竜田川の水を韓の紅色に絞り染めするとは。

花の色は うつりにけりな

いたづらに わが身世にふる ながめせしまに

小野

小町

花の色はすっかりあせてしまったなあ。私の容色も同じ。むなしく身をこの世において、春の長雨をながめて物思いにふけているうちに。

春過ぎて 夏来にけらし



花の春が過ぎて夏が来たようです。  
夏になると衣がえの着物を干すという天の香具山に、真つ白  
い洗たく物がひるがえっているのですから。

天の原 振りさけ見れば 春日なる 三笠の山に 出でし月かも  
安倍 仲麿  
広々とした大空を振り仰いではるかに眺めると、春日にある三笠  
山に、かつてのぼっていた月だったのだなあ。

瀬をはやみ 岩にせかるる 滝川の 逢はむとぞ思ふ  
崇徳院  
われても末に 逢はむとぞ思ふ

浅瀬の流れが速いので、岩に堰き止められる急流が二つに分か  
れても、また合流するように、いまは二人が別れていても、  
将来再び会おうと思うのです。

16 方丈記

鴨 長明

ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮  
かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたる例なし。

世中にある人と栖と、またかくのごとし。

たましきの都のうちに、棟を並べ、豊を争へる、高き、いやし

き、人の住ひは、世々を経てつきせぬものなれど、これをまことかと尋

ぬれば、昔在りし家は稀なり。或は去年焼けて今年作れり。或は

大家亡びて小家となる。住む人もこれに同じ。所も変わらず、人も多

かれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に、わづかにひとりふたり

なり。朝に死に、夕に生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。

川は、涸れることなく、いつも流れている。そのくせ、水はもとの水ではない。よどんだところに浮かぶ水の泡も、あちらで消えたかと思ふと、こちらにできていたりして、けっしていつまでもそのままでない。世間の人を見、その住居を見ても、やはりこの調子だ。

壮麗な京の町に競い建っている貴賤の住居は、永久になくならないもののようにだけれど、本当にそうかと一軒一軒あたってみると、昔からある家というのは稀だ。去年焼けて、今年建てたのもあれば、大きな家が没落して小さくなったものもある。住んでいる人にしても、同じこと。所は同じ京であり、人は相変わらず大勢だが、昔会ったことのある人は、二、三十人のうち、わずかに一人か二人になっている。朝死ぬ人があるかと思えば、夕方生まれる子がある。まさに、よどみに浮かぶ水の泡にそっくりだ。

## 17 徒然草 (序段・第一段)

吉田 兼好

(序段)  
つれづれなるままに、ひぐらし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

(第一段)  
いでや、この世に生まれては、願はしかるべきことこそ多かめれ。

御門の御位はいともかしこし。竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬ

こそやむごとなき。

(以下略)

(序段)  
じよだん

なすこともない所在なき、ものさびしさにまかせて、終日、硯に向  
かつて、こころに浮かんで消えていく、とりとめもないことを、なん  
ということもなく書きつけていると、我ながらあやしくも、もの狂お  
しい気持ちができることではある。

(第一段)  
だいいちだん

さて、この世に生を受けたからには、誰でも、願わしいと思うこ  
とが、あれやこれやと、どっさりあるもののようにだ。帝の御位につ  
いては、申し上げるのも恐れ多い。帝の御子孫であれば、孫王方の  
ような御末流にいたるまで、人間の血筋ではないのが、まことに尊  
いことである。

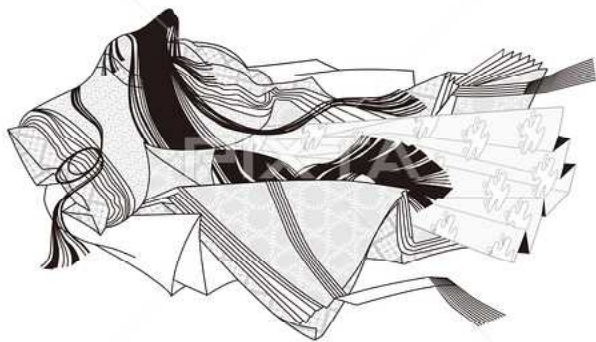
18 源氏物語(桐壺)  
げんじものがたり きりつぼ

紫式部  
むらさき しきぶ

いづれの御時にか。女御・更衣あまた

さぶらひ給ひけるなかに、いと、やむごとな  
き際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふあり  
けり。

はじめより、「われは」と、思ひあがり給へ  
る御かたがた、めざましき者におとしめそね  
みたまふ。おなじ程、それより下臈の更衣たち  
は、まして、安からず。



pixta.jp - 13859647

帝みかどはどなたの御代みよであつたか、女御にようごや更衣こういが大勢おおせいお仕つかえしてられた中に、最高さいこうの身分みぶんとは言いえぬお方かたで、格別かくべつに帝みかどのご寵愛ちようあいをこうむつていらつしやるお方かたがあつた。宮仕みやづかえの初めはじから、我われこそはと自負じふしておられた女御方にようごかたは、このお方かたを目めに余あまる者ものとさげすんだり憎にくんだりなさる。同じ身分おなみぶん、または、それより低ひくい地位ちいの更衣達こういたちは女御方にようごかたにもまして気持きもちが収おさまらない。

## 19 枕草子まくらのそうし

清せい 少納言しやうなごん

春はるはあけぼの。やうやうしろくなり行く山やまぎは、すこしあかりて、むらさきだちたる雲くものほそくたなびきたる。

夏なつは夜よる。月の頃つきころはさらなり、やみもなほ、ほたるの多く飛おとびちがひたる。また、ただひとつふたつなど、ほのかにうちひかりて行くもをかし。雨あめなど降ふるもをかし。

秋あきは夕暮ゆうぐれ。夕日ゆうひのさして山やまのはいとちかうなりたるに、からすのねどころへ行くとして、みつよつ、ふたつみつなど、とびいそぐさへあはれなり。まいて雁かりなどのつらねたるが、いとちひさくみゆるはいとをかし。

日入りはてて、風の音、虫の音など、はたいふべきにあらず。

冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず。霜のいとしろきも、またさらでもいと寒きに、火などいそぎおこして、炭もてわたるもいとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火もしろき灰がちになりてわろし。

(訳)

春は、あけぼの。だんだん白んでくつきりとしてゆく山ぎわが、少し、赤みを帯び、明るくなって、紫がかった雲が細く横になびいているの。

夏はなんとといっても夜だ。月のあるころは言うまでもない、闇もやはり、蛍がたくさん入り乱れてとびかっているの。また、たくさんではなく、ただ一つ二つなど、かすかに光ってとんでいくのも、夏の夜の快い趣がある。雨などの降るのも面白い。

秋は、夕暮れ。夕日が差して、山のはしすれすれになっている時に、からすがねぐらへ行くというので、三つ四つ、二つ三つなど、飛んで急いで帰るのまで、しみじみとした感じがする。まして、雁などの列を作っているのが、ひどく小さく見えるのは、とても面白い。日がすっかり沈んでしまつて、風の音や虫の音などが聞こえるのもやはり、言い表しようもなく良いものである。

冬は早朝。雪が降っているのは、言うまでもない。霜がたいへん白くおいたのも、またそうでなくともとても寒い時に、火などを急におこして、炭火を持って行き来するのきわめて冬の早朝に似つかわしい。昼になって、だんだん寒気がうすらいでゆるむ一方になってゆくと、火鉢の火も白い灰が多くなつてしまつて、好ましくない。

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上には生涯をうかべ、馬の口とらへて老いをむかふるものは、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらえて、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢をはらひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に、白川の関こえむとそぞろがみの物につきてこころをくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取もの手につかず。

(以下略)

月日は、永遠に旅を続けていく旅人であり、来ては去り、去ってはくる年々もまた同じように旅人である。船の上で働いて一生を送り、旅人や荷物をのせる馬を引いて年をとり、老年を迎える者は、毎日の生活が旅であって、旅そのものを自分の住み家に行っている。風雅の道の古人達もたくさん旅の途中で死んでいる。わたしもいつの頃からか、ちぎれ雲を吹き飛ばす風に旅心をそそられて漂泊の思いがやまず、近年は海辺の地方をさまよい歩き、去年の秋、隅田川のほとりの破れ家に戻り、蜘蛛の古巢を払って、久しぶりの住まいにやがて年も暮れたのであった。が、新しい年になると、春霞の立ちこめる空のもとに、白川の関を越えたいと、そぞろ神が私にとりついて心を狂わせ、道祖神の出てこいという招きにあつて、取るものも手につかない。

21 謎掛け

一 腐った卵とかけて、暗い夜道をひとり行くととく。そのころは、  
どちらもきみがわるい。  
(黄身が悪い、気味が悪い)

二 あの娘をもらいたいとかけて、お茶漬けあがれととく。そのころ

は、いいなづけがある。  
(許嫁、良い菜漬け)

22 川柳・狂歌

一 這えば立て 立てば歩めの 親心

二 泰平の 眠りをさます 上喜撰(蒸気船) たった四杯で 夜も眠れず  
蒸気船 高級な お茶 四杯

23 落語 「寿限無」

熊五郎のところに男の子が生まれた。熊五郎は、和尚さんに「何かこう死なねえ保証付きのような、すてきな名前をつけてくれ」と頼み、つけてもらったのがこの名前である。

寿限無 寿限無、五劫の擦り切れ、海砂利水魚の水行末、雲来末、  
風来末、食う寝る処に住むところ、やぶら小路のぶら柑子、パイポ  
パイポ、パイポのシューリンガン、シューリンガンのグーリンダイ、グ  
ーリンダイのポンポッピーのポンポコナーの長久命の長助

友達のお金ちゃんが、寿限無になぐられて頭にこぶができた事を、  
寿限無の両親に言いつけに来たが、あまりに名前が長いので、話し  
ている内にこぶが引っ込んでしまったというお話。

24 我輩は猫である

夏目 漱石

我輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生まれたかとうと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番獰悪な種族であったそうだ。この書生というのは時々我々をつかまえて煮て食うという話である。しかしその当時は何という考もなかったから別段恐いとも思わなかった。ただ彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあったばかりである。(以下略、文字など原文のママ)

25 雨ニモマケズ

宮沢 賢治

雨ニモマケズ

風ニモマケズ

雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ

丈夫ナカラダヲモチ

慾ハナク

決して瞋ラズ

イツモシヅカニワラツテキル

一日ニ玄米四合ト





味噌みそト少すこシノ野菜やさいヲタベ

アラユルコトヲ

ジブンヲカンジョウニ入いレズニ

ヨクミキキシワカリ

ソシテワスレズ

野原のほらノ松まつノ林はやしノ蔭かげノ

小サナ萱かやブキノ小屋こやニ牛いテ

東ひがしニ病びょうき気きノコドモアレバ

行いツテ看かん病びょうシテヤリ

西にしニツカレタ母ははアレバ

行いツテソノ稻いねノ束たばヲ負おヒ

南みなみニ死しニサウナ人ひとアレバ

行いツテコハガラナクテモイイトイヒ

北きたニケンクワヤソシヨウガアレバ

ツマラナイカラヤメロトイヒ

ヒデリノトキハナミダヲナガシ

サムサノナツハオロオロアルキ

ミンナニデクノボートヨバレ



pixa.jp - 27174264



ホメラレモセズ

クニモサレズ

サウイフモノニ

ワタシハナリタイ



26 雪国

川端 康成

国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。信号所に汽車が止まった。

向側の座席から娘がたって来て、島村の前のガラス窓を落とした。雪の冷気が流れこんだ。

27 学問のすゝめ (初篇)

福沢諭吉

天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと言えり。されば天より人を生ずるには、万人は万人皆同じくらいにして、生まれながらに貴賤上下の差別無く、万物の霊たる身と心との働きをもつて天地の間にあるよろずの物を資り、もつて衣食住の用を達し、自由自在、互いに人の妨げをなさずして各々安楽にこの世を渡らしめ給うの趣意なり。されども今広くこの人間世界を見渡すに、かしこき人あり、おろかなる人あり、貧しきもあり、富めるもあり、貴人もあり、下人もありて、その有様雲と泥との相違あるに似たるは何ぞや。その次第甚だ明らかなり。実語教に、人学ばざれば智なし、智なき者は愚人なりとあり。されば賢人と愚人との別は、学ぶと学ばざるとに由つて出来るものなり。

(訳)

「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」と言われている。つまり、天が人を生み出すに当たっては、人はみな同じ権利を持ち、生まれによる身分の上下はなく、万物の霊長たる人としての身体と心とを働かせて、この世界のいろいろなものを利用し、衣食住の必要を満たし、自由自在に、また、互いに人の邪魔をしないでそれぞれが安楽にこの世をすごしていけるようにしてくれているということ

だ。しかし、この人間の<sup>にんげん</sup>世界<sup>せかい</sup>を見渡<sup>みわた</sup>してみると、賢<sup>かしこ</sup>い人も愚<sup>おろ</sup>かな人<sup>ひと</sup>もいる。貧<sup>まず</sup>しい人も、金持<sup>かねも</sup>ちもいる。また、社会<sup>しゃかい</sup>的地位<sup>てきちい</sup>の高い人<sup>ひと</sup>も、低<sup>ひく</sup>い人もいる。こうした雲泥<sup>うんでい</sup>の差<sup>さ</sup>と呼ぶべき違い<sup>ちが</sup>はどうしてできるのだろうか。その理由<sup>りゆう</sup>は非常<sup>ひじょう</sup>にはつきりしている。『実語教<sup>じつごきょう</sup>』という本<sup>ほん</sup>の中に、「人<sup>ひと</sup>は学ばなければ、智<sup>ち</sup>はない。智<sup>ち</sup>のないものは愚<sup>おろ</sup>かな人<sup>ひと</sup>である」と書<sup>か</sup>かれている。つまり、賢<sup>かしこ</sup>い人<sup>ひと</sup>と愚<sup>おろ</sup>かな人<sup>ひと</sup>との違い<sup>ちが</sup>は、学ば<sup>まな</sup>ないかによつてできるものなのだ。

## 28 ことわざ

### 一 百聞は一見にしかず

百聞<sup>ひやくぶん</sup>は一見<sup>いっけん</sup>にしかずとは、何度<sup>なんど</sup>くり返し聞<sup>き</sup>いても、一度<sup>いちど</sup>でも実<sup>じつ</sup>際<sup>さい</sup>に見<sup>み</sup>ることは及<sup>およ</sup>ばない。何事<sup>なにごと</sup>も自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の目<sup>め</sup>で確<sup>たし</sup>かめてみるべきだという教<sup>おし</sup>え。

### 二 情けは人のためならず

情<sup>なさ</sup>けは人<sup>ひと</sup>の為<sup>ため</sup>ならずとは、人<sup>ひと</sup>に情<sup>なさ</sup>けをかけるのは、その人<sup>ひと</sup>のためになるばかりでなく、やがてはめぐりめぐつて自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>に返<sup>かえ</sup>ってくる。人<sup>ひと</sup>には親切<sup>しんせつ</sup>にせよという教<sup>おし</sup>え。

### 三 弘法、筆を選ばず

弘法筆を選ばずとは、本当の名人は、道具の善し悪しなど問題にしないというたとえ。

### 四 二度あることは三度ある

二度あることは三度あるとは、物事は繰り返し起こる傾向があるものだから、失敗を重ねないようにという戒め。

### 五 過ぎたるはなお、及ばざるがごとし

過ぎたるは猶及ばざるが如しとは、度が過ぎることは、足りないことと同じくらい良くないということ。

### 六 二兎を追うものは一兎をも得ず

二兎を追う者は一兎をも得ずとは、欲を出して同時に二つのことをうまくやろうとすると、結局はどちらも失敗することのたとえ。

### 七 口は災いのもと

口は災いの元とは、不用意な発言は自分自身に災いを招く結果になるから、言葉は十分に慎むべきだという戒め。

八 ぬかにくぎ

糠ぬかに釘くぎとは、やわらかい糠ぬかに釘くぎを打うつように、何なんの効きき目めも手て  
ごたえもないことのとたとえ。

九 猫ねこに小判こばん

猫ねこに小判こばんとは、価値かちの分わからない人ひとに貴重きちょうなものを与あたえても何なん  
の役やくにも立たたないことのとたとえ。

十 後悔こうかい先に立たたず

後悔こうかい先に立たたずとは、すでに終おわったことを、いくら後あとで悔くや  
んでも取とり返かえしがつかないということ。

29 俳句はいく

一 古池ふるいけや かわず飛とび込こむ 水みずの音おと 松尾まつお 芭蕉ばしやう

二 花はなの雲くも 鐘かねは上野うえのか 浅草あさくさか 松尾まつお 芭蕉ばしやう

三 秋深あきふかき 隣となりは何なにを する人ひとぞ 松尾まつお 芭蕉ばしやう

四 菜なの花はなや 月つきは東ひがしに 日ひは西にしに 与謝よさ 蕪村ぶそん

五 春はるの海うみ ひねもす のたりのたりかな 与謝よさ 蕪村ぶそん

六 我われと来きて 遊あそべや親おやの ない雀すずめ 小林こはやし 一茶いっさ

七 やれ打うつな はえが手てをすり 足あしをする 小林こはやし 一茶いっさ

八 瘦やせがえる 負まけるな一茶いっさ これにあり 小林こはやし 一茶いっさ

## 一 ゆく秋の

大和の国の 薬師寺の 塔の上なる

一ひらの雲

(訳)

晩秋の奈良、薬師寺の古塔の上に、一片の雲が浮かんで  
いる。ああ、その一ひらの雲よ。

## 二 金色のちひさき鳥のかたちして

銀杏ちるなり 夕日の岡に

与謝野 晶子

(訳)

金色の鳥のような形をして銀杏の葉が夕日をうけて、  
きらきらと輝いて舞い降りるように岡の上に散っています。

## 三 くれなゐに

二尺のびたる 薔薇の芽の

針やわらかに 春雨の降る

正岡 子規

(訳)

二尺(約六十センチ)ほどのびた、えだの針もまだやわら  
かな、みずみずしくれない色の薔薇の芽をのばすように、  
しつとりとやわらかな春雨が降り注いでいる。

## 四 幾山河

越えさり行かば 寂しさの

終てなむ国ぞ 今日も旅ゆく

(訳)

いくつかの山や河を越えていったならば、このさびしい思  
いが消え去る国に行き着けるのだろうか、今日もそれを求  
めて旅を続けていくことだ。

若山 牧水

## 五 霞立つ

長き春日を 子供らと

手まりつきつつ この日くらしつ

良寛

(訳)

春霞の立つ長い一日を、子供たちと手まりをつきながら  
今日もいっしょに遊んですごしたよ。